

第5回 大阪四大学交歓演奏会

1970年6月9日
大阪府青少年会館
文化ホール

第 5 回 大 阪 四 大 学 交 歓 演 奏 会

— ご あ い さ つ —

今宵は多数ご来場下さいまして誠にありがとうございます。私達の大阪四大学交歓演奏会も、今年で5回目を迎えるに至りました。

しかし、昨年は大学紛争により、私達は多くの問題に直面し、考え悩みました。そのため、演奏会は中止となり、またこの中止によって四大学合唱連合自体の在り方にも、いろいろな問題が生じました。私達は、昨年秋から今年にかけて、大阪四大学の在り方、私達の活動の中心となっている交歓演奏会をどのように考えているか等に関しての討論を行ないましたが、そのほとんどにはっきりした解答を与えていません。けれども、演奏会を開く事に対する熱意は一致したものです。また、このような時に演奏会を開き、力一杯歌うことにより、私達のとるべき道が開けてくるようにも思えるのです。

どうか、大阪四大学の向上発展のため、皆様のご指導、ご協力をお願い致します。

Program

—— エ ー ル 交 歓 ——

I. 大阪市立大学グリークラブ

組 曲 「 海 」

あたたかい島にて

中 川 重 和 指 揮

丸 い 形

北 川 冬 彦 作 詞

渚

高 田 三 郎 作 曲

波

海 景 色

II. 大阪外国語大学グリークラブ

松 岡 一 仁 指 揮

Negro Spirituals

See Dat Dade In De Lowly Manger

Keep In The Middle Of The Lord

Sometimes I Feel Like A Motherless Child

Lord I Want To Be A Christian

Steal Away

Didn't My Lord Deliver Daniel ?

Soon Ah Will Be Done

—— Intermission ——

Program

II. 大阪大学男声合唱団

組 曲 「四 月 の 顔」

木製の人魚

つめたい春の憂鬱

湖上をわたる狐

四月の顔

香爐の秋

山 県 茂 和 指 揮

大 手 拓 次 作 詞

林 宏 太 郎 作 曲

VI. 大阪府立大学グリークラブ

組 曲 「枯木と太陽の歌」

枯木はひとりで唱う

花と太陽の会話

冬の夜の木枯の合唱

枯木は太陽に祈る

松 下 真 澄 指 揮

中 田 浩 一 郎 作 詞

石 井 勲 作 曲

森 谷 あ き よ 伴 奏

V. 合 同 演 奏

鹿 島 正 昭 指 揮

和 田 恵 美 子 伴 奏

狩 人 の 合 唱 Weber「魔弾の射手」より

水 夫 の 合 唱 Wagner「さまよえるオランダ人」より

巡 礼 の 合 唱 Wagner「タンホイザー」より

曲 目 解 説

組 曲 「 海 」

近年男声合唱の沈滞が伝えられ、その原因の一つとして、男声合唱曲の不足があげられています。いわゆるドイツもの、また、いわゆる邦人作品もそろそろタネ切れになってきたといとことでしょう。混声合唱曲だと中世ポリフォニーにまで手をのばせばまだまだ多くの曲があります。そこで男声合唱団でも、パレストリーナの曲などを移調して演奏することもあります。音域が低くなり、声質も同じであるために、各声部の旋律線を生かす事は、かなりむづかしいようです。やはり、男声合唱はポリフォニックな曲よりホモフォニックな曲に向いているようです。しかし今までの男声合唱トーン一本ではマンネリズムはまぬがれないでしょう。新しい響きの世界を開拓することが今後の道ではないかと思います。

高田三郎の作品は混声合唱では、爆発的人気呼んだ「水のいのち」や「私の願い」、その他の作品で有名ですが、男声合唱作品は演奏される機会も少ないようです。高田三郎作品の最近の流行について菅野浩和氏は「合唱サークル」(1969, 6)で従来のドイツロマン派的作風の多かった日本の合唱界にフランス的近代的響きのする合唱曲が出現したために新鮮さを感じたためだろう。と述べておられます。実際、私たちが、この「海」を唱ってみましても従来の重厚なハーモニーといった男声合唱のトーンとは違った、むしろ軽く爽かな感じがするのです。高田、作品のもう一つの特徴は、ことばの扱い方にもあるようです。楽譜を一見してわかるように、八分音符・三連音・四連音等、とてもこまかいリズムが多いのですが、これが話し言葉のアクセントに密着しているのです。のみならず詩のニュアンスが生きっており、唱えば唱うほど詩の本質に近づいてゆくような気持がします。

今宵は、声による音楽ではなく、ことばによる音楽をめざして励みたいと思います。

北 川 冬 彦 作 詞
高 田 三 郎 作 曲

— 海 —

I. あたたかい島にて

樹々がびっしり実をつけた
黄いろい実 赤い実 青い実
何という豊かさだ
葉は厚ぼったくて
冬をうけつけない
道々の石崖には
昆布のような草が垂れ下っていた
家々の庭は掃ききよめられ
そこに立働く娘たちの
心はのびのびとし
あたたかく美しい
遠くで山鳩が
しきりに鳴いていた

II. 丸 い 形

街中は 丸い石だらけだ
激浪が時間をかけて念入りに
つくり上げた仕事なのだ
傷痕一つない
丸い石の 石崖にかこまれた
どこかの家のなかで
妊婦が産気づく
丸い石の囲いの
どこかの墓地に
老衰病死の棺が埋められる
岸辺にせまる
波頭の白い泡と
満 月

III. 渚

渚に あおむけに寝そべって
さっきから
小石を いくつも海へほおり込んだ
小石の落ちた音は
ひとつも聞こえない

Negro Spirituals

悲劇は1619年、20人の黒人奴隷を乗せた帆船がヴァージニアに着いた時に始まる。船底に折り重なるように押し込められた奴隷船——その悪臭は洋上数マイルにわたって、他の船を悩ませたと言う。——での扱いも、新大陸での扱いよりましなものであった。ただ奴隷という立場だけでなく、アフリカ黒人であること——これは北米大陸の支配者たるアングロサクソンとは全く異なる文明・世界観を持つことを意味する。——が彼等の生活を一層みじめなものにした。黒人達は肉体の自由ばかりでなく、精神の自由、否精神そのものまで奪われたかに見える。が、彼等の精神、アフリカの魂は大西洋を越えても消えることなく、新大陸においても見事な結実を見せた。これが黒人霊歌である。アフリカのリズム、メロディーが Bible をうたったのだ。黒人霊歌は、現世の苦しみとそれから逃避することへの願望をうたったものだとよく言われるが、それだけで黒人霊歌をいつくすとしたら、余りにも浅薄な解釈である。逆境をはねかえそうとする人間の意志を見ずして、あなどった見方になってしまうのである。黒人の悲劇は現在にいたるまでまだ続いている。アメリカにおける人種間抗争も激化する一方である。

今宵、黒人霊歌をうたうにあたり、私達は過去における黒人の苦しみ・願望・抗議をうたうだけでなく、現在の状況に達するSorrow, wish and protest をうたいたいと思います。

Sometimes I Feel Like A Motherless Child

《時には母のない子のように》

時々家から遠くはなれ、母などいない気持になる。時々もう天国に昇り、地上にはいないような気持になる。暖かい抱容力の象徴たる母。その母を奪われ

絶望にあえぐ。そして絶望は天国への強いあこがれとなる。

Steal Away

《安らぎの地へ》

この現世を果敢なみ、来世の幸福をねがいながら「イエスのもとへのがれていこう。ラッパの音が聞こえる。主がお招きだ、さあ」と歌われる。

Didn't My Lord Deliver Daniel ?

《神はダニエルをお救いにならなかったか》

神がダニエルをライオンの檻から救いだしたという旧約聖書中の物語（ダニエル書5・6巻）をもとにした歌です。「主はダニエルをお救い下さった。だから貴方も私も救われるのだ」と篤い信仰をうたっています。

Soon Ah Will Be Done

《やがて終りの日が》

生命の炎が消えるとこの世にも別れだ。早くイエスの御もとに行きたい。天国でイエスと共に平和に暮らしたいという心からの願い。イエスこそは母であり、自分達を暖かくつつんでくれる抱擁そのものである。このステージでも、ここ数年のニグロのステージ同様、この曲が最終演奏曲目となっています。

曲 目 解 説

組 曲 「四月の顔」

死すべき存在としての人間が、常に求めてやまぬ永遠とのつながり。自己の生を注意深く見つめるならば、人は必ずやそこに無限に深い虚無の淵を見いだすことでしょう。永遠とのつながりは、その虚無の深淵をとびこえたむこう側にあるとも言えるのではないのでしょうか。

大手拓次の詩は、私たちにこの永遠へのつながりを感じさせてくれるのです。彼の作品の中にうたいあげられた幻想の世界は、それを表現することばのひびきによって色あざやかにきらめきかがやきます。永遠につながる母韻のひびきこそ、彼が、そして作曲者林宏太郎が追求したものなのです。

宏太郎氏が述べているように、“独特なみごとな語いで彩られた妖気と、色香との陰影に満ちた詩、換言すれば、彼の幻想と五官の織りなす豊満な言葉のアラベスク”は私たち今日の若人にも共通する、何かしら現代絵画を彷彿とさせる印象を与えます。

私たち阪大男声メンは、最近数年間この大手拓次・林宏太郎両氏の作品のすばらしさに魅せられ、続けてとりあげてまいりました。本日演奏します「四月の顔」は4年前にはじめてこの両氏の手になります作品として、とりあげたものでございます。ご来聴の方々の中には、当時の演奏をお聞きの方もおられるかと存じますが、指揮者もメンバーも新たなる熱意にもえて永遠に向かってうたいます私たち若人の声に耳をおかたむけ下さい。

木 製 の 人 魚

こゑはとほくをまねき、
しづかにべにの鳩をうなづかせ、
よれよれてのぼる火縄の秋をうつろにする。
こゑはさびしくぬけて
うつろを見はり、
ながれる身のうへにほひをうつす。
くちびるはあをくもえて、
うみのまくらにねむり、

大 手 拓 次 作 詞
林 宏 太 郎 作 曲

むらがりしづむ藻草のかげに眼をよせる。

湖上をわたる狐

みなぎる湖上のうえに
爪をといで啼きわたる狐、
まどろみの窓をひらいて
とおく冬の國へ啼いてゆく狐、
その肌に刺の花をうゑつけて、
ゆたかに蒼茫の衣をぬぎかへす。

四 月 の 顔

ひかりはそのいろどりをのがれて、
あしおともかろく
かぎろひをうみつつ、
河のほとりにはねをのばす。
四月の顔はやはらかく、
またはちらひのなかに溶けながら
あらあらしくみだれて、
つばみの花の裂けるおとをつらねてゆく。
こゑよ、
四月のあらあらしいこゑよ、
みだれても みだれても
やはらかいおまへの顔は
うすい絹のおもてにうつる青い蝶々の群れ咲き。

香 爐 の 秋

むらがる鳥よ、
むらがる木の葉よ、
ふかく、こんとんと冥護の谷底へおちる。
あたまをあげよ、
さやさやとかける秋は いましも伸びてきて、
おとろへた人々のために
音をうつやうな香炉をたく。
ああ 凋滅（爐）のまへにさきだつこゑは
無窮の美をおびて境界をこえ、
白い木馬にまたがってこともなくゆきすぎる。

曲 目 解 説

組 曲 「枯木と太陽の歌」

私達はその日常性において見つけ出す「美」というものを理論化し、その論理を感覚を通して、音で表現することが、合唱における美の追求ということにはかならない。つまり私達は、合唱曲において、曲想が云々ということよりも、その表現するという時点で感じることに、またその日常性の中で不感症になってしまっている私達の心の奥底のものが、「美しいもの」を美しいと感じる感覚を大切にすることの方が重要ではないでしょうか。裏をかえせば、その日常性に対する問いかけではないでしょうか。例えば多くのアマチュア合唱団がめざしているメンタルハーモニーとは、一体何なのか、また本当に存在するのだろうか？という疑問を発することではないでしょうか。

「枯木と太陽の歌」という曲は、私の中では多田武彦に代表されるような日本の合唱組曲と、一つのくぎりをもっています。モチーフの単純さ、またははっきりとした起承転結を有し、この単純さがこの組曲のもつダイナミックそしてバイタリティーになっていると思われ、また全体的に線の太さを感じることができるのであります。

作曲者は、「この曲はある意味で作詩と作曲が同時に進んでいった」と書いています。しかし、そのことは私にとって全く無意味であり、私にとって重要なのは、この曲がこうしてここに存在するということだけなのです。

I. 枯木はひとりで唱う

枯木はひとりで唱う

枯木は独りきりで唱う

中 田 浩 一 郎 作 詞
石 井 勲 作 曲

枯木は独りなのだ

枯木は独りきりだよ

今宵の月の出に

夜空に向って

心こめて唱うよ

生命の限り呼ぶよ

きれいな月の夜だ

悲しい祭りだ

大地の深い眠り覚めよ

枯木は思うさま唱うよ

地軸をふるわせ 星にもとどけと

枯木は すべての思いこめて

夜空に向って 唱うよ

神への願いだ

神への祈りだ

襲うは くろかげ

悪魔の 怒りだ

轟く かみなり

きらめく 光りだ

大地は狂うよ

この世の終りだ

天地は裂けるよ

Ha ha ha ha ha ha

枯木よ折れるな

枯木よ折れるな

悪魔に打ち克て

消え去れ くろかげ

枯木は独りで唱う

枯木は独りきりだ

独りで唱うだけだよ

ひとりで ひとりで-----

曲 目 解 説

合 同 演 奏

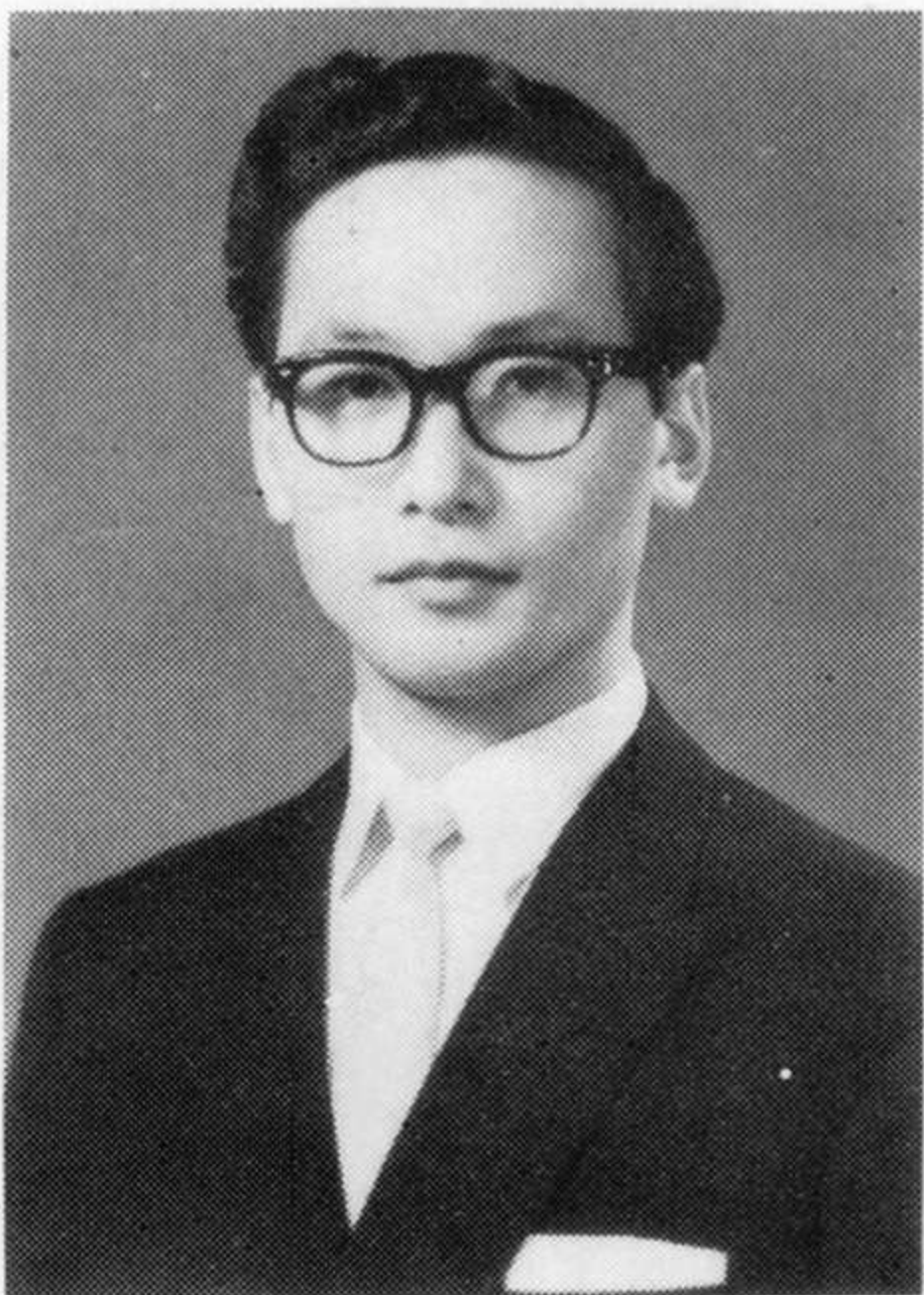
私たちがこんにちオペラとよぶ芸術の歴史は比較的新しく、今から 370 年ほど前、ちょうど 17 世紀に移ろうとするころ、ルネッサンス文化の爛熟期にあったイタリアの古都フィレンツェに生まれました。

17 世紀初頭のオペラ創生期における最大の作曲家はモンテヴェルディで、彼の力によってオペラという新芸術は短期間の間におどろくべき発展をとげました。それから後、18 世紀後半のウィーンにモーツァルトという天才が出現し、オペラの世界は彼にとって、そのきわめて人間的な「歌」を自由に展開できる好適の場であったので、モーツァルトは永遠の美と生命にあふれた数々のオペラを生みました。

オペラという世界は本質的に劇的な特質をもち、豊かな感情表現を志向する 19 世紀ロマン主義音楽にとってうってつけの形式であったから、オペラは 19 世紀に至ってその黄金時代を迎えたのでした。そしてそれに前人未踏の豊かな実りをもたらした 2 人の大作曲家が、奇しくもともに 1813 年に生まれたのです。すなわち、ドイツのワーグナーとイタリアのヴェルディでした。

今宵はそれらの数多いオペラ合唱曲の中から、ウェーバー、ワーグナーの作品 3 曲を選んでお贈り致します。

——指揮者・ピアニストご紹介——



鹿 島 正 昭

昭和 41 年 東京芸術大学声楽科卒業
大阪音楽大学勤務 二期会



和 田 恵 美 子

昭和 43 年 大阪音楽大学ピアノ科卒業
大阪音楽大学勤務

Message

関西合唱連盟会長
全日本合唱連盟名誉会員

長 井 齊

大阪所在の国，公立四大学が結束して，合同の合唱音楽会を敢行することは，現下に於ける各合唱団の態度と使命を表明するものとして注目されるところです。

また，演奏の面では，それぞれに異なった声色と技法とによって演出される，壮廉・詩情・緻密・或いは優雅といった謂わば郷土的な諸性格が，対照的に表現されるであろうことは来会者諸賢にも多くの興味をもって傾聴していただけることを疑わないのです。

このようにして行動を共にした四大学ではあるが，各自合唱団がその気風と，カラーを鮮明に表出することが，この合同演奏会を多彩な成功に導く唯一ともいってよい鍵^{キイ}である事を自覚して，力演を期待するところです。

大阪府合唱連盟理事

日 下 部 吉 彦

近ごろ，ジョイント・リサイタルや交歓演奏会，さらにはリーグを組んでのコンサートが盛んです。私はこの傾向を，とても好ましいことだと思っています。単独のリサイタルも結構ですが，仲のいいグループが，相い寄り一堂に会してコンサートを開く，その収獲は多大です。悪い意味での競争心ばかりあおることになっては，何にもなりません。互いにライバルの長所を感じとり，自らの骨肉に植えつけるのに，これほどいいチャンスはありません。東西四大学のジョイントが毎年開かれています。あのジョイントが突破口になって，関西流の合唱が，東京流の長所を採り入れ，そのまた逆の現象もあって，日本の大学合唱音楽の水準を，うんとレベルアップした実例を，私は知っています。

残念ながら，みなさんの四大学ジョイントについては，今回が初めてですが，この機会が大阪の大学合唱音楽のレベルを向上させ，さらには関西の，いや全日本のレベルアップにつながってゆくことを期待しています。がんばって下さい。

プロフィール

大阪市立大学グリークラブ

市大キャンパスのポプラ並木が、うす緑の葉を広げ始める頃、わがグリークラブは新入生を迎えて本格的な活動に入ります。

かわいい感じの女の子たちがペチャクチャ、ペチャクチャ、なにやら楽しそうなおしゃべりに夢中になっているのを横目で睨みながら、野郎という表現がピッタリの、うさんくさそうな男連中を手当り次第に、クラブへ引っ張り込む、そんな勧誘活動を精を出すわけです。

勧誘活動が一段落する暇もなく、きょうの、この演奏会と、これと並んで旧三商大演奏会との準備に大忙しの二ヵ月を過ごします。入部して間もない新入生もやりくりの苦しいクラブの都合上、晴れのステージに立たされるわけですから、きょうあたりひよっとすれば、歴史的な大チョンボに出会うかも知れません。

夏。信州合宿。起床・体操・朝食・練習・昼食・練習・休憩（風呂）・夕食・練習・就寝のなんとも単調な日々の繰り返し。それでも結構楽しいものですが、「合宿終わり、解散」の声を聞くのは、やはり格別の味があるとみえ、野郎ばかりが三々五々よからぬ相談をして思い思いの地へ出かけます。この夏季合宿が済めば新入生とクラブの古参連中との区別はなくなり親密感が大いに増します。

12月の市大演奏会を最後に今年のグリーの活動は終了しますが、このあとの反省会では1年の活動を振り返って良かった点・改善しなければならない点を話し合い、来年以降のクラブ運営に役立つよう図っています。

大阪外国語大学グリークラブ

私達大阪外国語大学グリークラブの創立は昭和初年で、40数年の伝統を持っています。その間クラブの活動は戦争などで完全停止されるといった時代があり、現在のグリークラブは戦後クラブが再建されて14年目のものです。一時は部員数が60余名の時もあったのですが、現在は30名の部員数で活動しています。そして、その部員不足が大きなクラブの問題にここ数年なっております。しかし、私達は部員不足を補うものとして部員間のまとまりを一層大切にしています。全学で1800人足らずの大学という背景のもとに、他の大学に比べて絶対数はきわめて少ないのですが、全課程・全語科が一つの学舎に統一され、上六というきわめて良い環境とともに部員がまとまるのに好条件がそろっております。

昨年の暮、戦後クラブ再建後第13回の定期演奏会を持ちました。いつの頃からか、外大の我がクラブに黒人霊歌が定着し、そして又いつのまにか定期演奏会のラストステージに定着してしまいました。そして現在我々は伝統の黒人霊歌を固持するだけではなく、それを我々流に理解し、うたおうと Negro 研究会をつくって努力しております。同時に Negro の発音・文化・ニグロ文学といったものを専攻を通して持ちより、部員間でいろいろな機会に話されております。

クラブ活動も現在活発で、昨年の全学封鎖の中では強い試練を受け、一層の自信となっています。今年になってからは岐阜・瀬戸へ演奏旅行。合ハイ・新入生歓迎合宿。又夏には信洲で合宿をする計画でいます。そして、できれば他の高校・大学祭にも参加したいと思っております。そして、12月5日、サンケイホールで定演を持つ計画でおります。なおこの時のチケット希望される方は我がクラブ部員に今からお申しつけ下さい。

プロフィール

大阪大学男声合唱団

——ある新入生の告白——

オリエンテーションの時、ふらりと男声の部屋の方へ足が向いたのが過ちの第一歩でした。宿屋の客引きみたいな人に連れられて部屋へ入ると、中ではそろいのブレザーにうれしそうな赤ネクタイをした男達が大声（100ホン以上）を発していました。僕はその声の毒気に当てられて暫く呆然としていましたが、気が付くと入団カードにサインしていたのでした。

練習は毎日昼休みと月曜・金曜の夜です。夜の練習は十三のある幼稚園で行なわれます。夕方5時45分きっかり色の黒い小さな指揮者が先づメンネル体操で腕立てや腹筋などコッテリしぼります。ほんの1分ほど遅れて来たY氏が罰に腕立てを10回余計にさせられました。10分遅れたT氏はあとでリンチを受けたそうです。続いてやはり色の黒い今度は少年のいったおじさん（あとで桜井吉明先生と解る。ゴメンナサイ）の指導で腹をポッコンポッコンさせたり、息をチューチューさせたり、舌をペロペロさせたりする運動をします。これが呼吸発声の基本だそうです。

練習が終わると外はもうまっ暗。夜の十三はネオンの海です。パチンコ屋・飲屋……もう目がチカチカしてしまいます。でも何とか家にたどり着かなくては。

このあいだはコンパがありました。生まれて始めて飲んだ酒の苦かった事。（本当はちょっといけると思ったけど）やがて酔いが回ってくると、何か意味のよく分らない、でもとても面白い歌が始まります。ダウンした者には先輩がやさしく介抱して、添寝までしてくれたそうです。（ワア気持悪い）

入団以来2ヵ月、色々な先輩と知り合いましたがみんないい人ばかり。入団して本当によかったと思っています。そして是非4年間このクラブをやり通そうと思っています。

大阪府立大学グリークラブ

本日はご多忙中のところ、四大学交歓演奏会に、おいで下さいましてありがとうございます。

我々府大グリーは今年で21周年を迎え、新しい第一歩を踏み出そうと、グリーメン一同張り切っています。

今年もやる気十分の新入生が入って来ました。今年は何のクラブも部員難で部員獲得は壮烈を極め、徹底したマンツーマン方式の結果、おだてられたのか、おどかされたのか、他部に比べて多くの部員が入部して来ました。

コンパで先輩にからむ者、勉強以外に何も知らない（？）という顔をした者、自称内気という者。これらの新入部員が4年間にどう変わるだろうと先輩達は、恐ろしがったり、たのもしがったり……。

とにかく今年は面白い1年になりそうです。

先輩諸氏も負けてはならじと、彼等の特技（？）に精を出しています。

とにかく好きな連中ばかりで、さしずめ、“鬼”のような存在です。暇さえあれば部室で将棋をやる者、授業をサボってパチンコ・マーじゃんに精を出し、ハコテンになっても、東に誘う人あれば行って又負け、西に美人居れば行って振られるそんな連中でも、練習には精力的（？）に参加しています。

本日の為に強化練習をし、部員一同頑張っています。

どうか我々府大グリーの演奏をじっくりとお聞き下さい。

大阪四大学の歩み

昭和37年1月、環境条件の類似した、地理的に近距離にあるこの大阪の四大学が、お互いの交流を深めようという目的で、交歓演奏会を持つ事が決定されました。

第1回演奏会は、同年6月に毎日ホールで、第2回は翌年11月にサンケイホールで開かれました。しかし、この2回の演奏会では、その目的であった交流がなされず、また、四大学の本質的な在り方の追求が欠けていたため、第3回演奏会は中断せざるを得なくなりました。

その後、39年秋より、四大学の在り方・運営方針等に関する討論がなされました。その結果41年秋に「四大学は互いにその交流を深め、互いの合唱レベルの向上を図り、ひいては大阪府の合唱レベルの向上に寄与す」という目的が設定され、大阪四大学合唱連合規約が作られました。そして、運営面においては各大学委員20名からなる委員会が設置され、現在行なわれているような合議制、職務分担制が施されました。

このような方針に基づき、第3回演奏会が42年6月大阪大学中之島講堂で、つづいて翌年6月第4回演奏会が、今宵と同じこの文化ホールにおいて開かれました。その間、互いの理解を深めるため、全団員によるジェネラルミーティング、演奏会後の合評会やゲネプロ等が行なわれました。

しかし昨年、大学紛争による演奏会中止は、再び活動の形式主義化、四大学の目的の形骸化に対する批判の生起する契機となりました。

そのため、昨年秋のジェネラルミーティングや、今年各大学において徹底的討論が行なわれましたが、演奏会に対する一応の一致とみたほかは、依然解決がなされていません。

したがって、この演奏会を機に、四大学の在り方に対して、さらに討論を行ない、全団員の積極的意志の結合により、さまざまな、広範な活動を行ないたいと思っております。

本日は大阪四大学交歓演奏会にお越し下さいましてありがとうございました。今宵の演奏に関してご意見・ご批判をお聞かせ下さいますよう、そしてまた今後とも大阪四大学にご声援下さいますようお願い申し上げます。

《大阪四大学合唱連合》

